

小学校音楽科における主体的・創造的に取り組む力の育成を目指して(2年次)

—子どもの発達の段階に応じた、鑑賞と音楽づくりの関連の在り方—

日比 淳子(京都市総合教育センター研究課 研究員)

いま、音楽科教育では、表現及び鑑賞の各活動において思考・判断・表現する力の育成を目指し、表現と鑑賞を関連付けた指導、及び音楽づくりと鑑賞の充実が求められている。昨年度は、音楽を形づくっている要素を要として、鑑賞と音楽づくりの関連を重視した学習モデルを提示した。今年度は、昨年度の研究を踏まえ、音楽づくりの活動において即興的に表現する学習を取り入れ、鑑賞と音楽づくりのより密接な関連付けを図った。また、各活動を関連付けるに当たり、学習のねらい及び評価の視点について具体的に提示し、子どもの発達の段階に応じた、鑑賞と音楽づくりの関連の在り方について考察した。

第1章 1年次の研究からみえてきた課題

第1節 1年次の実践から

昨年度の研究において、鑑賞と音楽づくりの関連を図ったことによる一定の成果はみられた。しかし、子どもたちが、自らの力で主体的・創造的に自分たちの音楽をつくったり、友だちのつくった音楽や楽曲を聴いたりすることができていたかという新たな課題がみえた。

また、昨年度は、音楽づくりの活動において、学習指導要領における指導事項イ「音楽の仕組み」を手がかりにして音楽をつくることを意識するあまり、指導事項ア「音遊びや即興的に表現する」ことを踏まえて学習を進めることができていなかった。よって、音楽づくりの活動において、即興的に表現する学習を取り入れることが、より子どもたちの主体的・創造的に音楽づくりに取り組む力を高めることができるのではないかと考える。

第2節 鑑賞と音楽づくりの関連をより密接にするために

音楽づくりの指導事項アの項目は、主に音楽を特徴付けている要素を手がかりにした音楽づくりを示していると考えられる。即興的に表現する学習は、まとまりのある音楽をつくる素地にあたる学習であり、音楽づくりのための引き出しを多くもつことのできる学習であるにとらえることができる。このことから、即興的に表現する学習を充実させることが、まとまりのある音楽をつくる学習をより豊かにすると考える。

また、題材の目標及び評価の視点を考える際は、学習のねらいを明確にし、題材全体を貫く〔共通事項〕を設定することが重要である。題材全体で取り扱う内容を、〔共通事項〕に示す音楽を形づくっている要素の中から、子どもの発達の段階に応じて適切に設定することが大切であると考えられる。

第2章 子どもの発達の段階に応じた、鑑賞と音楽づくりの関連の在り方

第1節 鑑賞と音楽づくりの関連の充実に向けて

本研究では、鑑賞の活動から音楽づくりの活動における即興的に表現する学習、即興的に表現する学習からまとまりのある音楽をつくる学習へ、そして、最後に、まとまりのある音楽をつくる学習から再び鑑賞の活動へ戻るという流れで関連を図る。

即興的に表現する学習を通して、子どもたちは、音や音楽をつくる面白さや楽しさを実感することができる。そのことが、次のまとまりのある音楽をつくる学習における豊かな表現につながり、更に、その後の鑑賞の活動において聴き方を豊かにすることにも結び付くと考える。

また、それぞれの活動において、指導者による指導の工夫や支援が、主体的・創造的に取り組む力を育むために有効であると考えられる。

第2節 鑑賞と音楽づくりの関連における評価

鑑賞と音楽づくりを関連付けるに当たり、学習のねらいを設定した上で、楽曲の何に気を付けて聴くのか、何をどのように工夫して音楽をつくるのかといった評価の視点を明確にすることが重要である。

また、各時における評価の視点を明確にし、様々な評価の方法から一人一人の学習状況を評価することにより、子どもの様子を的確に把握することができると考えられる。そして、各時の評価の視点とその具体の姿を示す。評価の視点とは、「おおむね満足できる状況」(B)のことである。これをもとに「十分満足できる状況」(A)と判断される子どもの具体の姿や、「努力を要する」(C)と判断される子どもに対する具体的な支援を想定することで、指導者はそれらの視点をもって授業に臨むことができると考えられる。

第3章 実践授業から

第1節 各題材の概要と設定理由

今年度は、鑑賞と音楽づくりの関連の充実を図った題材を、第4学年と第6学年で二つずつ設定し、実践授業を行った。

第2節 即興的に表現する学習を取り入れた実践授業

○第4学年の実践から『変そう』を見つけよう！ ことで音楽づくり」

即興的に表現する学習では、箏のすてきな音を見つける活動に取り組んだ。子どもたちは、様々な音を見つけ、奏法や表現の表し方の発想を広げることができた。そして、見つけた音を組み合わせ、三人でまとまりのある音楽をつくった。音楽づくり後の鑑賞の活動では、即興的に表現する学習を踏まえた記述がみられ、楽曲の特徴や演奏のよさに気付くことができた。

○第6学年の実践から「音探しの旅～身体を楽器にした音楽の面白さを味わおう～」

即興的に表現する学習では、二人組で身体を使った音を探る活動に取り組んだ。子どもたちは、手や足などを使って出せる様々な音を見つけていた。また、その探した音を生かして、四人で四つのパートのリズムとテーマのリズムをつくることができた。そして、つくったリズムの重ね方やつなげ方を工夫し、まとまりのある音楽をつくった。音楽づくり後の鑑賞の活動では、即興的に表現する学習を十分経験して音楽をつくったことにより、子どもたちは、はじめの鑑賞と比べ、音楽を聴き取り、そのよさを感じ取る力が高まったと実感することができた。

第3節 評価の実際

○第4学年の実践から「音楽の会話を楽しもう」

即興的に表現する学習では、「音楽への関心・意欲・態度」を、つくっている様子の観察や発言、学習カードから評価した。子どもたちは、日常生活の場面を想起し音で会話する活動において、音の高さや長さを変えながら即興的な表現に進んで取り組むことができた。特に、様々な音を出そうと積極的に試みたり、全体交流で振りを付けたり顔を見合わせたりしながら発表した子どもは、意欲の高まりを見取ることができ、「十分満足できる状況」(A)であると考ええる。

○第6学年の実践から「魅力発見！こととリコーダーで音楽づくり」

音楽づくり後の鑑賞の活動では、「鑑賞の能力」を、聴いている様子の観察や発言、学習カードか

ら評価した。b児は、はじめの鑑賞において「おおむね満足できる状況」(B)であったが、最後の鑑賞における紹介文では、楽曲の特徴である速度、強弱の変化を聴き取り、そこから波の様子を想像したり感じ取ったりしていた。更に、即興的に表現する学習のときに知った、弦をすべらせる表現を曲の中にも見つけることができていた。これらのことから、鑑賞の深まりを見取ることができ、「十分満足できる状況」(A)であると考ええる。

第4章 より主体的・創造的に取り組む力の育成を目指して

第1節 研究の成果と課題

実践授業における子どもたちの姿やアンケート結果などから、以下のような成果がみられた。

<即興的に表現する学習を取り入れたことによる効果>

- ・今まで気付かなかった新たな発想をもち、即興的に表現する面白さを感じる事ができた。
- ・まとまりのある音楽をつくる時に役立ち、自らの力で主体的・創造的に音楽づくりに取り組むことができた。
- ・自分たち自身がつくった音楽と関わらせながら、楽曲の特徴や演奏のよさに気づき、味わって聴くことができた。

<学習のねらい及び評価の視点を明確にしたことによる効果>

- ・題材全体及び各時を通して、子どもたちが何を学ぶのかを明らかにして授業に臨むことができ、適切な支援を行うことができた。
- ・様々な評価の方法から子どもたちの学習状況を評価することで、より妥当な評価につながった。

第2節 これからの音楽科教育

本研究の実践を通して、友だちとの関わりや、指導者の適切な声かけ、支援などにより、子どもたちが主体的・創造的に取り組もうとする姿がみられた。これからの音楽科教育において、協同的な取組を充実させること、子どもの表現や鑑賞の力に指導者が積極的に価値付けを行うこと、音楽づくりの活動における指導者の指導観を見直すことなどが大切であると考ええる。

また、音楽の授業で学んだことの積み重ねによって、ふだんの生活の中で音楽をつくったり聴いたりするときにそれらを生かすことができる。このことが、音楽と生活との関わりに関心をもつ態度を育むことにつながると考える。